

1 3年間の計画

	目標	平成29年度(2017年度)	平成30年度(2018年度)	平成31年度(2019年度)
中学校ブロック保幼小中連携	自己肯定感の向上 〜集団づくりとコミュニケーション力を育てる〜	<ul style="list-style-type: none"> ・小中合同授業研の実施 ・夏季小中合同研修会の実施 ・南中ブロックスタンダードの実践検証と、めざす子ども像の共通理解 ・人権学習におけるの共通理解 ・いきいきスクールの実施 ・研究授業や参観など、各校の行事の交流 ・保幼小中カリキュラムの実践と検討 ・連携通信の発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマや教科を設定した小中合同授業研の実施。 ・夏季小中合同研修会の実施 ・南中ブロックスタンダードの定着に向けての検証 ・人権学習におけるの共通理解 ・いきいきスクールの実施 ・研究授業や参観など、各校の行事の交流 ・英語教育の小中・小小交流 ・保幼小中カリキュラムの実践と検討 ・連携通信の発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマや教科を設定した小中合同授業研の実施。 ・夏季小中合同研修会の実施 ・自己肯定感向上につながる南中ブロックスタンダードのさらなる検討、検証 ・人権学習におけるの共通理解 ・いきいきスクールの実施 ・研究授業や参観など、各校の行事の交流 ・英語教育の小中・小小交流 ・保幼小中カリキュラムの実践と検討、見直し ・連携通信の発行
確かな学力の育成	思考力・判断力・表現力の育成 自ら学ぶ意欲と	<ul style="list-style-type: none"> ・4・5年生の算教科における習熟度別学習の実施 ・3・6年生の算数でのT・Tの実施 ・校内漢字検定の実施 ・外国語活動・国語科での校内研究授業の実施 ・校内学力実態調査(年2回)学習アンケートの実施 ・家庭学習の手引き、「タケノコ」の配布「南中スタンダード」の継続実施 	<p>29年度の取組みの成果の継承発展と課題の検討をおこなう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内学力実態調査や学習アンケートから見える課題についての検討や対応の検討 ・「書く意欲」向上をめざしたことばの力のプリントの活用 ・外国語活動などの校内研修の継続的实施 ・家庭学習の手引き、「タケノコ」の配布 ・習熟度別学習の継続・3～6年を対象にした「たけのこ教室」の継続 	<p>30年度の取組みの成果の継承発展と課題の検討をおこなう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の力プリントなどを活用した「書く意欲」向上にむけての取組みの継続 ・校内学力実態調査や学習アンケートから見える課題への校内体制の実施・検討 ・校内研修の継続的实施 ・家庭学習の手引き、「タケノコ」の配布 ・習熟度別学習の継続・3～6年対象の「たけのこ教室」の継続改善
豊かな人間性を育む	安心・居場所・つながりを大切に する集団づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器ごとにクラスの友達を知り自分のことを伝えることを目的として一斉人権学習を全校で実施。 ・地域の方と連携したあいさつ活動の実施 ・地域と職員の交流会を年2回実施 ・国際理解学習5年生コリアンタウンワールドワーク ・支援学級担任による障がい理解教育の出前授業(1年から5年生に年1～2回実施) ・6年生リパティ―大阪見学 ・子ども主体の児童会活動 ・道徳の教科化に向けて内容の実施、検討 	<p>29年度の取組みの成果の継承発展と課題の検討をおこなう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援教育、国際理解教育についての校内研修及び研究授業の実施。内容の検討 ・地域理解、国際理解、障がい理解の推進のための各学年の取組みの継続的実践 ・子ども主体の児童会活動の推進、学校全体での取組みの検討 	<p>30年度の取組みの成果の継承発展と課題の検討をおこなう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援教育、国際理解教育についての校内研修及び研究授業の実施。内容の検討 ・地域理解、国際理解、障がい理解の推進のための各学年の取組みの検討、実践 ・子ども主体の児童会活動の継続に向けた検証。
健康・体力の増進	①運動の楽しさを味わわせる授業づくり ②体育科を通しての仲間づくり ③体力向上を目標とした短時間運動プログラムの実践	<ul style="list-style-type: none"> ・目標に向けて大切にしたい取組みのポイントについて、継続して取り組む。 ・外遊び週間や行事、委員会活動を通じた体力づくりを行う。 ・業間(25分間)に「なかよしタイム」として体力づくりの時間を設定する。活動は、ペア学年などの異年齢集団を基本として行う。異年齢集団を形成して一斉に遊ぶ機会をもつことで、体を動かすことの楽しさだけでなく、相手を思いやる心も育てる。 ・地域の協力や小中連携を通して体育の授業や体育的行事の充実を図り、運動の楽しさを十分に味わわせる。 ・短時間運動プログラムの実践に取り組む、運動能力の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目標に向けて大切にしたい取組みのポイントについて、継続して取り組む。 ・技能を伸ばすだけでなく、友だちと関わらせながら作戦を立てたりルールを工夫したりする楽しさを味わわせる。 ・体育の活動内容の工夫と運動量を確保する授業づくりを行う。 ・業間等を利用して、楽しく体を動かす機会を増やす。 ・望ましい生活習慣、食習慣を確立する取組みを進める。 ・短時間運動プログラムの実践を継続して行い、取組み状況の交流や改善を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目標に向けて大切にしたい取組みのポイントについて、継続して取り組む。 ・体育授業における個や集団にあつためあて学習の展開と教材・教具や学習形態の工夫 ・体を動かしたくなる運動環境の工夫をする ・委員会活動を通じた、子ども主体の体力づくりを行う。 ・短時間運動プログラムの実践を継続して行い、取組み状況の交流や改善を図る。
支援教育の充実				

2

今年度の結果と取組みについて

(1) 全国学力・学習状況調査

○●国語●○

国語A

(領域ごと)

①話すこと・聞くこと

概ね良好な結果であった

②書くこと

課題が残る結果であった

③読むこと

やや課題が残る結果であった

④言語事項

課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式

課題が残る結果であった

②短答式

課題が残る結果であった

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

話すこと・聞くことに関しては全国平均よりは低かったものの87%以上の正答率に達していた。無解答率も比較的少なかった。慣用句の活用は全国平均よりは低かったものの正答率は81%であった。

消毒や設備を漢字で書く問いについては全国との差が大きく漢字の定着について課題がみられた。

国語B

(領域ごと)

①話すこと・聞くこと

やや課題が残る結果であった

②書くこと

課題が残る結果であった

③読むこと

課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式

やや課題が残る結果であった

②記述式

課題が残る結果であった

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

記述式の設問については、正答率が他の設問に比べて解答率が低くなる傾向にあった。無解答率が高いという課題は依然みられた。選択式の問題については全国よりは高かったものの比較的無解答率に改善傾向が見られた。

「紹介する文章」を基準に書くときの工夫を選択する設問については2ポイント差でほぼ全国平均に近い正答率であった。

分析

全国の無解答率が昨年度よりも1ポイント以上あがる中、本校は昨年度よりも無解答率が下がった。短答式や考えを書く問題については依然無解答率が高く課題がみられる結果であったが、記述式の設問についても取り組む姿勢が少しずつではあるが見られた。

漢字の正答率の低さについては校内の漢字テストの取り組み方や、反復練習の更なる推進を検討する必要があると考える。

記述式の設問については、資料を読み設問も条件をふまえて書くという経験を5年生までの学習の中で慣れていく必要がある。また、設定時間の中で問題に向かうという基本的なテストに取り組む姿勢が課題になっていると考えられる

○●算数●○

算数A

(領域ごと)

①数と計算

やや課題が残る結果であった

②量と測定

やや課題が残る結果であった

③図形

課題が残る結果であった

④数量関係

やや課題が残る結果であった

(問題形式)

① 選択式

やや課題が残る結果であった

② 短答式

やや課題が残る結果であった

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

角度を選んだり、混み具合について選んだりする設問については解答率が高かったが、小数を含む割り算の問題についての解答率が低かった。

算数B

(領域ごと)

①数と計算

やや課題が残る結果であった

②量と測定

課題が残る結果であった

③図形

課題が残る結果であった

④数量関係

課題が残る結果であった

(問題形式)

① 選択式

やや課題が残る結果であった

②短答式

課題が残る結果であった

③記述式

課題が残る結果であった

(無解答率)

やや課題が残る結果であった

(その他)

今年度も記述式については無解答率が依然高い結果になった。
メモを読み取ってグラフを読み取る記述の問題についてはとくに正答率が低かった。

分析

算数 A では、「整数どうしの大きさを比べて十の位に入る適切な数字書く」という設問では全国平均を上回っており位取りなど数については学習内容の定着がみられた。

算数 B については、全国の無解答率が昨年度よりも 1 ポイント以上上がった中、葦原は昨年度よりは無解答率が下がった。短答式や考えを書く問題は依然として課題は大きい、少しずつでも書こうという意欲はもっているのではないかと考えられる。

文章や図を読みとりその中から、必要な情報を集める力や理論的に説明をするという力が求められる。5 年生までの既習事項の定着に加え国語の学習のような「読む」、「考えを書く」という力が求められる内容になっている。

昨年度からの引き続きの課題として問題の意味を理解できていなかったり、答え方が分からなかったりした児童もいたのではないかと考えられる。

4, 5 年生の習熟度別学習の中で既習事項を繰り返し学習したり、文章を読んで考えるたりする学習の取り入れなどが必要になっていくと考える。学習内容の活用につながる内容についても取り組んでいきたい。

年に 2 回おこなっている四則計算の診断テストも今後も継続していく。

○●理科●○

(領域ごと)

- | | |
|---------|---------------|
| ① 物質 | 課題の残る結果であった |
| ② エネルギー | 課題の残る結果であった |
| ③ 生命 | やや課題の残る結果であった |
| ④ 地球 | 課題の残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|---------------|
| ① 選択式 | やや課題の残る結果であった |
| ② 短答式 | 課題の残る結果であった |
| ③ 記述式 | やや課題の残る結果であった |

(無解答率) 概ね良好な結果であった

(その他)

- ・もともと正答率の高かった設問
海水と水道水を区別するために、2つの異なる実験方法から得られた結果を基に判断した内容を選ぶ
- ・もともと正答率の低かった設問
一度に流す水の量と棒の様子との関係から、大雨が降って流れる水の量が増えたときの地面の削られ方を選び、選んだわけを書く
- ・もともと無解答率の高かった設問
食塩水を熱したときの食塩の蒸発について、実験を通して導きだす結論を書く
- ・もともと無解答率の低かった設問
野鳥のひなの様子を観察するための適切な方法を選ぶ

分析

27年度と比べ、全国平均と比較すると、若干の正答率の向上が見られた。「人の腕が曲がる仕組みについて、示された模型を使って説明できる内容を選ぶ」「回路を流れる電流の向きと大きさについて、実験結果から考え直した内容を選ぶ」といった設問は全国の平均を超えることができた。

一方で、「より妥当な考えをつくり出すために、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できる」「実験結果から言えることだけに言及した内容に改善し、その内容を記述できる」といったような記述式の設問では課題が見られた。

実験を行う中で、予想・実験・考察というような流れを意識づけることにより、論理的なものの方につながり、ICTや資料などを使った調べ学習を行うことで、情報の取捨選択をする力、集めた情報から思考する力、図などを取り入れわかりやすく説明する力を育むことができると考える。そのような学習の積み重ねが、今回の大きな課題でもある、資料を読み、設問の様々な条件を踏まえ記述するという設問に対応できる力につながっていくと考える。また、既習の学習を積み上げるために、日々の学習はもちろんだが、しっかりと習熟の時間をとることも大切にしていきたい。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

今年度は国語・算数すべてにおいて前年度よりも正答率は少しではあるが高くなった。無解答率に関しても昨年度から改善がみられた。文章を読む力や考えを書く力を育てる取組みを学校全体で検討実施していく必要がある。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

今年度は全教科を総合して、中間層の割合が増え、エンパワー層も昨年度よりも増加している。特に国 A、算 A の学力低位層の割合は昨年度よりも大幅に増加した。漢字や四則計算などの基礎的な学力について改めて定着をはかる取組む必要があると考える。

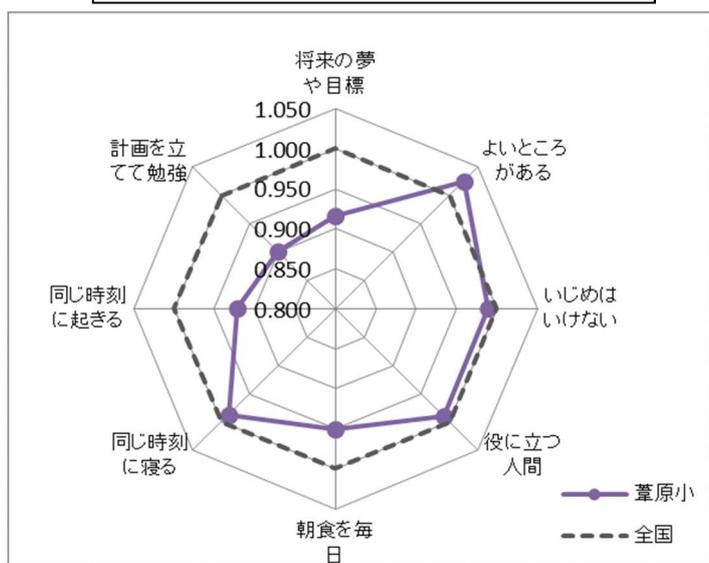
○●取組み●○

学力向上に関する取組み

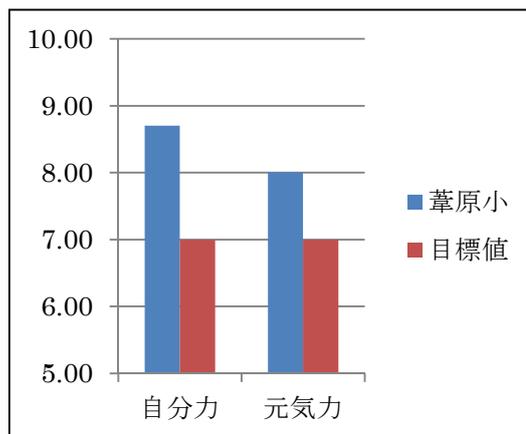
- 算数科における様々な学習形態の実施
躰きが出始める4・5年生の算数において、子どもの実態や単元の内容に合わせて「習熟度別授業」「分割授業」「ティームティーチング」など、様々な形態の授業を行う。算数の苦手な児童は基本をじっくりおこない、得意な児童は難しい問題に挑戦したり、言葉や図で分かったことを説明する活動をしたりというように習熟度別授業をおこなう事で基礎の定着につながるだけでなく、算数の楽しさや、自ら学ぶ意欲を育てていく。また、少人数での学習の中子どもたちのニーズや課題を知り、細かな指導が可能になる。
- 子ども主体の授業づくり
年3回の研究授業を中心に、子どもたちが進んで考え活動できる授業づくりの研究を行う。昨年度より国語科の研究をしており、今年度も継続して、国語科における「書く意欲を高める」子ども主体の授業づくりを研究推進していく。今年度は外国語活動についても研究授業をおこない2020年度からの外国語活動の教科化に向けて子ども主体の授業づくりをおこなっていく。
- ユニバーサルデザインの授業の推進、葦原スタンダードの活用
すべての子どもが安心して参加できる学級をつくり、分かりやすい授業の工夫を行うために、ユニバーサルデザインの授業を推進する。また、学習規律を示した葦原スタンダードをすべての学年で活用していくことで、学年が変わってもスムーズに学習できるようにする。
- 校内漢字検定の実施
3学期に校内漢字検定を行い、学習に対する子どもの自信を育てるとともに、漢字の習熟を図る。
- 学習アンケートの実施
学習に対する子どもたちの意識や家庭学習の状況などのアンケートを行い、分析した結果を日々の授業づくりや指導に活用する。
- 校内学力実態調査の実施
算数科における計算領域のテストを行い、習熟の状況を数値的に明らかにする。課題の見られた部分は、授業や朝学習、宿題などで重点的に復習を行う。また、75%未満の子どもたちに関しては、職員全体に周知し、必要に応じた支援を行う。
- 家庭との連携
家庭学習の定着と、自学自習力の育成を図るため「家庭学習の手引き」を作成する。また、「タケノコ」4・5年においては、「算数のコースわけプリント」などで子どもたちの学習の様子を保護者に知らせ、家庭との連携を図る。
- タケノコタイム（学力保障教室）の実施
今年度より、お昼の休憩時間に3～6年生を対象に、自ら学ぶ意欲の向上を目的に、算数教室をおこなう。自ら進んで学習することを、学校全体の文化として今後定着をさせていきたい。
- 保幼小中連携
保幼小中連携カリキュラムを通じて、中学校ブロック内での実践の共有や合同研修会をおこなっている。授業を公開し、各校の研究や課題を交流することで中学入学時の段差を少しでも解消し、確かな学力保障につとめていきたい。
- すべての子どもが安心して学習に取り組むための教育環境の整備、見直し及び授業中規律、学習及び生活ルールの確認
- 難しい課題に取り組むための心の体力の育成

○●子どもたちに育みたい力●○

5つの力 全国平均との比較



5つの力 目標値との比較



今年度は質問紙項目が大幅に変更になったため、5つの力をこれまでどおり算出することができませんでした。そのため、全国平均との比較(レーダーチャート)は8項目、目標値との比較(棒グラフ)は、3項目とも実施した『自分力』と『元気力』のみとなっています。

分析

本校は、地域の行事や活動が多く、それを支えてくれている人、見守ってくれている人も多い。

また、学期ごとにクラスの友達と向き合う取り組みとしてクラスミーティングもおこなっている。その結果自分力の項目の中の「人の役にたつ人間になりたいと思う」「いじめはどんな理由があってもいけない事だと思う。」について当てはまる。どちらかという当てはまる。が全国よりも高かった。また「自分にはよいところがある。」について当てはまると答えた児童は全国よりも4ポイントも多かった。自分や友達を大切にするという考えが学校として根付いてきていることによるものだと考える。

「朝食を食べる」「同じ時間に寝る」「同じ時間に起きる」という元気力については「できている」という回答は全国よりも低く昨年へ続き課題がみられた。引き続き生活リズムの定着については、地域、保護者に呼びかけ連携して取り組んでいく必要がある。

取組み

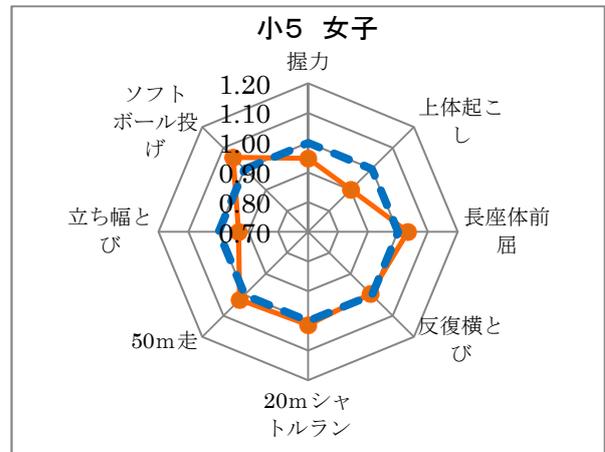
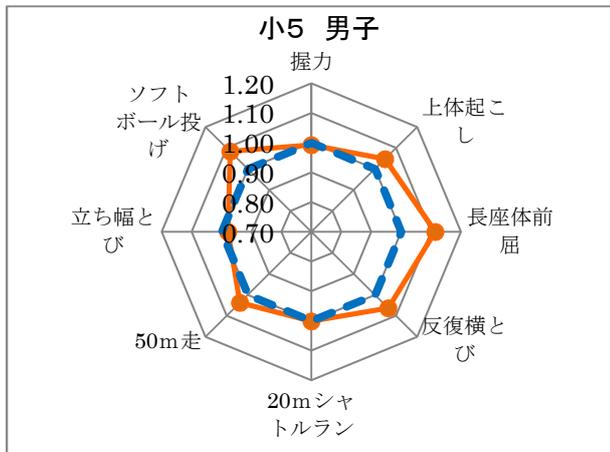
- ・自他ともに尊重し、夢を育む児童の育成
- ・友だちの思いに寄り添い、集団の中で自分の居場所を感じられる集団づくり
- ・自分を語り、友だちの思いを聴き、知る一斉人権学習の推進
- ・自分の考えをもち、友だちと交流しさらに学びを深めるための学びあい活動の取り組み
まちがいを大事にする授業づくり
- ・地域や地域の人との出会い、体験、共生の視点を大切に人権・同和教育の推進
- ・思考力・判断力・表現力の育成をめざした授業づくり
- ・学習面における実態把握と交流・算数の授業における習熟度別指導の実施
- ・校内漢字検定の実施・放課後や、休憩時間を使った補習の実施
- ・授業ルールの確立・学力実態調査の実施、活用・家庭への働きかけ(家庭学習の手引きの配布など)
- ・一人ひとりの教育的ニーズの把握と環境整備
- ・配慮を要する児童の様子、各種学校行事等に関する交流
- ・支援を要する児童に対する日常的な授業の手立ての成果や課題等を職員間で共通理解

(2) 全国体力・運動能力、生活習慣調査

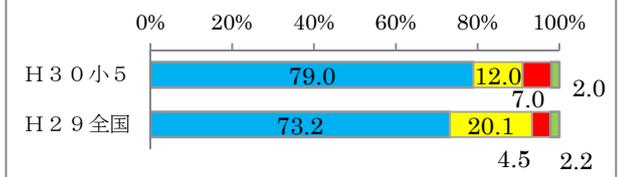
○●体力●○

男子 (小5)

女子 (小5)



運動・スポーツが好きですか(小5男子)



■好き ■やや好き ■ややきらい ■きらい

分析

男子のソフトボール投げ、長座体前屈、反復横跳びは全国の平均を上回る数値になり、良好な結果となった。それ以外の種目においても、全国平均に近い数値となった。男女ともにスポーツが好きという児童が半数を超えており、全国平均と近い結果となった。男女ともに運動場でよく遊ぶ姿が見られる。

しかし、女子の上体起こしと男女ともに立ち幅跳びの数値が全国平均と比べても大きく下回り、学校全体としても課題が残る結果になっており、来年度重点的に取り組んでいかななくてはならない。

また、運動が得意な児童と、運動が苦手な児童の、運動面での意欲、運動能力の差も大きくあることから、苦手な子どもが体を動かすことを楽しいと感じることができる体育の授業をめざし、授業改善に取り組んでいきたい。

取組み

①運動の楽しさを実感させる授業づくり

- ・運動の楽しさを十分に味わわせながら、指導内容の確実な定着を図る。それらをもとに、子どもの主体的な学習を促す。
- ・めあてのめあせ方、練習の場を工夫し、「できない。」という意識から、「こうしたら、できる。」などの技のコツへと意識を向かせる。
- ・自分のめあてを意識し、子どもたち一人ひとりが自分の課題に合わせてスモールステップで練習できる場を設定する。
- ・成果を実感できる授業や場の工夫を行う。

②体育科を通しての仲間づくり

- ・体力や技能向上を仲間とともに学習していく過程で自然と身につけていくためにも、人とかかわりながら、わかり合おうとする姿勢を育てていく。そのためにも、友だちとともに夢中になって取り組むための学習方法や場を工夫していく。
- ・体育の「授業づくり」だけでなく、体力の基盤である「健康づくり」や、外遊びの少ない子どもに友だちとともに遊ぶ楽しさを体験させる「仲間づくり」を大切にする。

③体力向上を目標とした短時間運動プログラムの実践

- ・授業の初めに、短時間の運動を継続的に取り入れることで、運動要素の効率的な向上を図る。継続的に行うことで運